

52:12 第五の月の十日・・・それは、バビロンの王ネブカデザル王の第十九年であった。・・・バビロンの王に仕えていた侍従長ネブザルアダンがエルサレムに来て、

52:13 主の宮と王宮とエルサレムのすべての家を焼き、そのおもだった建物をことごとく火で焼いた。

52:14 侍従長といっしょにいたカルデアの全軍勢は、エルサレムの回りの城壁を全部取りこわした。

52:15 侍従長ネブザルアダンは、民の貧民の一部と、町に残されていた残りの民と、バビロンの王に降伏した者たちと、残りの群衆を捕え移した。

52:16 しかし、侍従長ネブザルアダンは、国の貧民の一部を残し、ぶどう作りと農夫とした。

52:17 カルデア人は、主の宮の青銅の柱と、主の宮にある青銅の車輪つきの台と、海とを砕いて、その青銅をみなバビロンへ運んだ。

52:18 また、灰つぼ、十能、心切りばさみ、鉢、平皿、奉仕に用いるすべての青銅の器具を奪った。

52:19 また、侍従長は小鉢、火皿、鉢、灰つぼ、燭台、平皿、水差しなど、純金、純銀のものを奪った。

52:20 ソロモン王が主の宮のために作った二本の柱、一つの海、車輪つきの台の下にある十二の青銅の牛、これらすべての器具の青銅の重さは、量りきれなかった。

52:21 その柱は、一本の柱の高さが十八キュビトで、その回りを測るには十二キュビトのひもがいり、その厚さは指四本分で、中は空

洞になっていた。

52:22 その上に青銅の柱頭があり、一つの柱頭の高さは五キュビトであり、柱頭の回りに、網細工とざくろがあって、それもみな青銅で、他の柱もざくろもこれと同様であった。

52:23 回りには九十六のざくろがあり、回りの網細工の上には全部で百のざくろがあった。

エルサレムは陥落し、神殿の聖具も持ち去られました。神殿は神様がその民と出会ってくださる場所でありましたが、民の不信仰によって破壊されてしまったのです。神と民とのコミュニケーションがなくなってしまった、その象徴のような出来事です。

これで分かることは神様は神殿に限定されて存在なさるわけではないということ、神様はどこにでもおられる方であると分かります。この後、民がバビロニアに捕らえ移されても、主はそこでご自身を表してくださるのです。

信仰の場所や状況が保てなくこともあるかもしれませんが、主はそのような見えるものに限定されないことを覚えましょう。主はどこでも、どんな状況でもその力と愛を表してください。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

